実践報告

共同教育プログラムにおける基礎日本語教員の役割

－三重大学と天津師範大学の共同教育プログラムを例に－

武　　頴

合作办学项目中基础日语课教师的任务

—以三重大学和天津师范大学合作办学项目为例—

WU Ying

摘要

大学日语专业的基础日语课程，对于学生整个日语学习生涯占有基础性，甚至是决定性的重要地位，因而担任本门课程的教师的专业素养与职业素质显得尤为重要。本论文着眼于基础日语课教师的课堂教育实践，从语言教育的态度和内容、方法等，以及文化知识教育的意识与手段等方面对教师的责任与角色等进行了探讨。其次，对三重大学与天津师范大学合作举办日语专业项目内的基础日语教育实践进行了实际举证，对今后的教学实践改革提供进一步的启发和动力。

キーワード：基礎日本語　教員　役割　教育実践

1．はじめに

大学における日本語教育者はほかの分野の教育者と同じく、人材育成に大きな責任を負っている覚悟がなければならない。教員によって、教育理念や態度、専門知識の多少などは少しでも異なると、教育効果は大いに違うようになる。特に外国語教育は、ほとんどの学習者が大学に入ってからゼロから始まるものであるため、基礎外国語授業の担当教員は専門基礎知識を学生にきちんと定着させないと、人材育成が失敗になる恐れがあり、学生の卒業後の進路、乃至人生にも大きな影響がある結果となるので、重要視しなければならない。本稿は基礎日本語教員の役割を検討しつつ、天津師範大学と日本国立三重大学との日本語コース共同教育プログラム（以下「共同教育プログラム」という）における基礎日本語教育の担当教員の責任、特により効率的教育改革実践の成果と展開を考えたい。

２．言語知識教育について

２－１　教育の態度について

基礎日本語の講義は系統的に日本語の知識を教えるコースで、主に発音、文字、語彙、文法、文章の組み立て、言語機能などからなり、学生の五つの能力、（聞く力、話す力、読む力、書く力、訳す力）という総合的日本語力を育てる科目である。教員は教育によって、学生の日本語実践力、日本語で日本人と交流する能力などを育てるだけではなく、学生の学習方法、問題を解決する能力、考える力と創造力を育てるのも大事な任務である。

言葉の教育は理論教育と実践教育をともに行わなければならない。教員として、両者をほぼ同時にうまく進めるのが基本的教養となっている。それゆえ、基礎日本語教員になる前に、該当科目の特徴と主要内容、知識ポイント、それから主な教育方法、さらに関連文化知識などをきちんと理解しないと、理論教育も実践教育も、そして両者の統合教育がだめになり、予想される教育効果を収めることもできない。たとえば、中国人学習者が日本語で仕事などする時、中国式考え方、価値観によって言葉遣いを選ぶ癖がある人が多い。これらの問題をどうやって教育実践において改善するのも、担当教員の大きな課題となっている。

教員はどのような姿勢で学生を育てるのかについて、学生を常に励まし、特に他人に頼らずに、自分で問題発見、問題解決などという能力を育てるのが一番大事だと思う。学生に質問に答えてもらう場合、自主的に自分の考えを述べられるように、たとえ答えが間違えても、教員がすぐ指摘するのではなく、正解をどうやって見つける方法を教員が導かないといけない。事情を判断せず、正解ではないと学生が間違えているのを指摘するのは学生の自主権に打撃を与えるような行為となるので、学生が自信を失い、間違えるのを怖がり、学習には大きなデメリットとなる。中国の大学生はいわゆる90後になっているので、自己意識が強いため、指摘に敏感である一方、自己アピールがすきで、今までより活発な世代だと思われ、指摘より励ましのほうがいいと思う。大学の教員は青年学生に対して、自由、民主、人権を尊重するような社会を作るための人材育成を覚悟しなければならないと思う。たとえば、自己アピールには、一人っ子世代であるため、かわいがられることによって、うぬぼれる一面もあるし、近年中国人の家庭教育を重視される風潮もあり、学生はそれぞれ特別な個性や才能が備わっている。うぬぼれるような現実に合わない一面をうまく抑え、優れた個性や才能を活かしてもらうような教育をしなければならない。うぬぼれるのを抑えるのに、自分だけではなく、「他人」の存在に気づき、他人への尊重を強調するのが必要である。授業中の発表を例にすると、「他人」の発表を聞きながら、あるいはまったく聞かずに、自分のことをやる学生が多いため、「他人」の努力やアピールを尊

重し、きちんと聞くようにという指導が必要となる。こうして、学生は自己意識以外、「他人意識」も徐々に備え、自分以外の「他人」とうまく付き合うこともできるようになる。また、チームワークによる発表を準備してもらうことによっても、お互いに個性を磨かれ、「他人」の意見を尊重しながら、自分の意見や考えもうまく浸透させていくような能力も磨かれる。また、発表内容や仕方について、お互いにコメントを書いてもらい、他人の意見や指摘に対して、きちんと理性的に受け入れるような態度を育てないといけない。

学生には、同じ学習内容に対して、積極的に学ぶ人もいるし、消極的に学ぶ人もいる。元気で学べる「積極派」の心理状態には、大体学習内容に対して、「興味がある」、「やればできる」、「将来のために頑張らないといけない」などが挙げられ、こういう学生たちは心理的問題も少なく、計画的で、自己管理も上手な人が多い。一方、「消極派」は、「興味がない」、「私はできない」、さらに「先が暗い」と思い込んでいる人が多い。こういう学生の性格や生活習慣から見ても、自信がない、敏感で挫折に弱い、他人に頼りすぎる、あらゆることに計画性がなく、自己管理がだめな人が多い。天資や興味はともかく、積極的に頑張れる健康的心理状態と学習習慣などが大事である。教員として、知識を教える一方、効率的学習方法の応用をこなさせ、学生それぞれの特徴や習慣に合わせるような自己調整力を身につけてもらう努力も大事である。この「自己調整力」は自己管理に不可欠な能力で、うまく育つと、自信が築かれ、消極的から積極的へと転換でき、学習効果も大いに出る。この中、少しでも進歩が見られると、励ますような行為によって、学生は先生に期待され、暖かく見守られているようなことがわかり、努力できるようになる。そうではないと、理由を問わず、できが悪い学生に対して、指摘したり、責めたり、さらに皮肉るような行為があると、先生やほかの学生に対して敵対態度になり、勉強などをごまかすようになり、自分の学習、さらに人生にも無責任になるおそれがあるので、それをもたらす教員も責任が問われる。できが悪い学生にも必ず長所があるという理性的考えを込めて、それをうまく発見し、活かさせることを行いながら、先生からの愛と尊重を感じさせることによって、人材を発見し、育てる大きな一歩である。

２－２　教育の内容と方法について

基礎日本語教員は、教える内容に合わせて、正しい且つ効率的教育方法を磨き、合理的教育計画を立てなければならない。

前に述べたように、基礎日本語コースの主な課題は、学生の言語認知力と言語実践力を育てることで、教員の教える内容には、言語と知識という二大部分からなっている。言語教育には、発音が一番大事である。発音やアクセントなどがだめな教員だと、基礎日本語

教育乃至日本語教育にとってはわざわいと言っても過言ではない。教員には、日本人であれ、自国の人であれ、出身地によって、方言の発音が混じったりする人がいるのではないかと思う。日本概況、日本文化などの講義ならまだいいかもしれないが、基礎日本語の教員となると大きな問題となろう。

また、基礎日本語の授業においては、語彙、文法、文章が基本的教育内容で、知識の導入と補足、練習などが不可欠な指導方法となっている。語彙の教育では、「単語なら覚えればいい、何も教える必要がない」という考え方をしている教員もいるが、大間違いではないかと思う。言葉には、言葉自身の意味、字の発音の仕方と書き方、組み合わせ方、文化的意義、関連言葉など様々な情報が隠れている。その隠れているものを掘り出すのが教員の任務でもあり、うまく掘り出せるかどうかも学生の語学力、想像力、実践力にもつながる大きなポイントで、絶対見逃すべきではない。以下は初級日本語における「雨」、「お茶」、「神社」など三つの言葉を教えるときに、学生に教えられる内容を想定し、表にまとめてみた。

表 1

単語	発音など	使い方	関連文化の例	関連用語の例
雨	「あめ」の訓読み、「う」の音読み、「さめ」の音便など	雨が降る 雨が止む （雨に降られる） 学んだ文型に合わせて例文を挙げたり、考えさせたりする	酸性雨、狐の嫁入り、ほかの天気用語、天気予報における言葉遣いや専門用語など	小雨、大雨、にわか雨、春雨、五月雨、雷雨、豪雨、酸性雨、暴風雨、雨雲、雨傘など、また晴れ、雪、曇りなどの天気用語
お茶	「茶道」における「さ」の音便、接頭語「お」の使い方	お茶を飲む お茶を入れる お茶をどうぞ 学んだ文型に合わせて例文を挙げたり、考えさせたりする	日本のお茶と中国のお茶、日本の茶道と中国の茶道文化など	緑茶、紅茶、煎茶、抹茶、玄米茶、ほうじ茶、ジャスミン茶、茶道、ウーロン茶、プーアール茶、一期一会など

神社	「神」とお「社」それぞれの訓読みと音読み、またその例	神社へ参拝する 学んだ文型に合わせて例文を挙げたり、考えさせたりする	宗教について、神道教について、神社や神宮という建築物、有名な神社や神宮の紹介、神社で行う儀式（結婚式、七五三など）、初詣、天満宮、八幡宮など	神様、大社、神宮、鳥居、参道、参拝、詣でる、初詣、天満宮、八幡宮、お払い、おみくじ、お守りなど

言葉の教育には、教員の備わっている知識や想像力にもつながるもので、文字の訓読みと音読みを確認すること、関連文化を簡単に紹介すること、関連単語を学生の納得できる範囲で導入するのが必要である。言葉にはその自身の発音、意味、字の書き方、使い方（短文や文章の組み合わせ方）をきちんと教えるのが基本で、さらに、関連文化知識、関連用語などの紹介は教員の日本語力や文化知識が窺えるだけではなく、学生の想像力や、発散的考え方と研究能力などを育てるにも不可欠な模範行為ともなり、単語教育の内容や効果を充実させるような教育行為でもある。教員としては、十分な語彙量、関連知識とそれをうまく導入し、納得させ、学生の想像力と知識を深く理解しようとする探索精神を育てないとけないような意識がないと、単語の教育は不十分になるのはもとより、教員自身も該当言葉に関する理解も十分ではないと考える。

２－３　試験と受験指導について

学生は言語知識とそれを実際に利用する力も身につけなければならない。教員が講義中行うテストから、学校の統一テスト、国家による専門分野知識の測定試験、さらに国際的に認定できる試験まで、学生の日本語能力を測定する重要な手段とされ、学生の自己評価と学習計画などにとっても大きな意味がある。日本語力を測定する試験がたくさんあるが、基礎日本語段階の教育効果をよく測られる試験となると、中国の大学における日本語学部の学生が大体受ける試験と、筆者の受験指導経験を以下の表にまとめてみた。

表2

試験名	試験日	受験内容と指導など
日常テスト	随時に行う、一週間に一回ぐらい	語彙、文法、翻訳などで、学習効果のチェックと指導改善のヒントを主な目的としている。
中間テスト	大学の方針によって、学期の中間で行う。	行わない大学もあるが、そういう場合、教員の判断で行う。学習効果のチェックと指導改善のヒントを主な目的としている。
期末テスト	大学の方針によって、前期12月末から1月のはじめにかけて行い、後期は7月のはじめごろに行う。	文字、語彙、文法などの知識のチェックが主な内容で、穴埋め、選択問題、翻訳、作文などが主な問題形式となる。単位と卒業につながる試験である。学期中教えた内容全体を範囲とする。
日本語能力試験[1]（JLPT）N2	毎年7月と12月の第一日曜に行う。二年目前期（12月）の受験がおすすめ。	言語知識（文字・語彙・文法）、読解、聴解など三大部分に分けられる。日常教育において適当に浸透していくだけではなく、試験方針などに合わせて十分練習させる。
大学専門日本語四級試験 （中国教育部主催で、各大学の日本語学部二年生が試験対象。）	毎年6月中旬に行う。	レベルはJLPTN2程度で、聴解、文字、語彙、文法、読解、作文を主な問題とする。試験方針と内容に合わせて受験指導を行う。特に外国語大学では、卒業資格認定にもつながる。
日本語能力試験（JLPT）N1	毎年7月と12月の第一日曜に行う。	言語知識（文字・語彙・文法）、読解、聴解など三大部分に分けられる。日常教育において適当に浸透していくのみならず、試験方針などに合わせて十分練習させるのも大事である。５回以上の模擬テストがおすすめ。
大学専門日本語八級試験（中国教育部主催で、各大学の日本語学部四年生が試験対象。）	毎年12月中旬に行う。二年目後期（7月）の初受験がおすすめ。	レベルはJLPTN1程度で、N1以上の内容もあり、聴解、文字、語彙、文法（古文がある）、読解、作文を主な問題とする。試験方針と内容に合わせて受験指導を行う。

[1] 国際交流基金と日本国際交流支援協会が主催の試験で、原則に日本語を母語としない人を対象にしている。Ｎ１、Ｎ２、Ｎ３、Ｎ４、Ｎ５の5つのレベルがあり、学校での単位・卒業資格認定や企業での優遇など、さまざまなメリットがある試験である。http://www.jlpt.jp/

日常テストは教員個人的行為で、問題の内容も試験の仕方も担当教員が完全に把握できる部分で、学生の一時期の学習効果をチェックするのを目的としている。ここで一番大きな課題は、教員は責任を持って学生の学んだ知識を細かく、且つ様々な仕方、角度で測定できるかとのことである。試験は筆頭、口頭試験が主なやり方で、特に初心者に対しては、発音、アクセント、字の書き方と読み方、基本的文型が正しくできているかどうかを細かく、さらに厳しくチェックしなければならない。初心者段階で変な癖を直さないと、それからの学習に大きな影響になるので、特に気をつける必要があり、必要であれば、個別指導を行うのも大事である。初心者段階を乗り越えた学習者に対しては、知識をよく覚えているか、それをきちんと実際に使えるのかをチャックするのが大事になり、翻訳や作文などのような問題を出すのが考えられる。期末テストは学校の単位や卒業資格認定に関係があり、日本語能力試験なども学生の卒業後の進路などにつながるもので、これらの試験結果はすべて日々教育と学習の反映となり、教育者として、学生の進路、さらに人生にも責任を取るような覚悟で日々の積み重ねる努力をすべきではないかと思う。その中で、日常テストは大きな意味があるので、教員が怠らずに持続的に、且つ計画的に行わなければならない。そして、試験結果について、常に教育不足の点を反省し、次の教育活動の改善に取り組むよう心がけなければならない。

国際交流基金と日本国際交流支援協会が主催の日本語能力試験は世界的範囲で行われ、せめて中国では、今まで日本語教育業界においては、一番重視されている試験と言える。表に挙げたように、N2試験とN1試験を学生に受けさせるのが基本である。N2試験は中級日本語のレベルに相当し、大体二年生の前期末に自主的に受けさせるのを方針とする大学も少なくない。二年生前期末までの教育によっては、中級レベルには達していないが、学生の一年半の学習で身につけた日本語への認識、言語知識の累積、自力で知識を習う力を測定することができる。共同教育プログラムでは、N2試験を受けさせるが、合格を望んでいるわけではなく、学生が失敗するならきちんとこれまでの学習を反省し、学習方法などの改善に訴えてもらうが、受かるならこれまでの努力が実るのを自分で確認してもらい、次の学習段階の大きな激励になる。どちらかというと、落ちるといい、受かるといい、後期初受験のN1試験受験勉強のまたとなる原動力にもなる。また、日本国立三重大学への留学に備える必要があるため、「共同教育プログラム」における学生のN1試験初受験は二年生後期と要求され、留学までになるべく全員合格するのを望まれている。今まで担当クラスのN2合格率は90％以上を超えているし、N1試験については、昨年度（2017年7月）8期生の初受験は史上最優秀成績を遂げた（19人のうち10人が合格、最高点156点）ことから、日本人教員の多大な教育協力と言語環境の整備の影響もあり、「共同教育プログラム」の

基礎日本語教育効果が窺える。

今までの教育経験からすると、N1試験に合格した学生は学習意欲と動機を失い、次の段階の勉強を怠るのが多い。N1試験に合格すると、卒業後の進路を悩まなくていいという誤解があるからであろう。たとえいい仕事を見つけても、仕事上使用している日常表現や専門用語、職場でも活かせる幅広い言語知識、言語コミュニケーション力を磨くのが高級日本語段階の課題となるのを、基礎日本語教員から伝えるのも大事である。また、日本語測定試験には、実用日本語検定（J－TEST）[2]、ビジネス日本語能力テスト[3]などがある。また、翻訳試験には、中国政府主催と認定の翻訳等級試験があり、日本漢字能力検定協会主催の漢字検定試験などもあるので、試験のための学習ではないが、受験勉強によって、日本語力、総合日本語運用力、自主的学力などを磨くのにいい手段でもあるよう、学生への指導も勧められる。

3．文化知識教育について

3－1　相手国文化を伝える意識

言語は文化の担体であるため、第二言語習得とともに、相手国の文化導入も必要とされている。日本語教育においては、言語と文化と、どちらを先にするか、あるいはどちらが大事であるかの議論もあるが、言葉に隠れている文化を教えないと、言葉自身の意味も明らかにできず、うまく実際に使うこともできない例がたくさんある。言葉や表現を教える同時に、関連文化知識を少しずつ納得させ、日本人らしい考え方を備えてこそ、日本語をうまく使えるようになり、交流も順調になるわけである。そして、日本人の国民性格、「間」と「和」の文化、「内」と「外」、「建前」と「本音」、「以心伝心」の意識、日本人の人との接し方を理解してもらわないと、敬語、曖昧表現、異なる場面や話し相手に合わせる言葉遣いをうまく納得できないし、応用も難しくなる。特に、日本語能力試験を受ける段階となると、測定されているのが学生の言語知識にと止まらず、日本文化への理解、異文化コミュニケーション力も測定の目的となるので、文化知識教育も言語教育とともに行わなければならないし、学生の留学時の専門分野と卒業後の職業選択にも大きな啓発となる。

こうして、外国語教育とともに、異文化の概念を浸透させていくことと、文化意識を育

---

[2] 1991年から実施されている外国人日本語能力を測定する試験で、年6回実施される。
http://j-test.jp

[3] 公益財団法人・日本漢字能力検定協会主催の試験で、「ビジネス・コミュニケーション力」を評価するのを目的としている。企業の外国人採用、学校のキャリア支援などに活用されている。
http://www.kanken.or.jp/bjt/about/

てることによって、学生の視野も広がり、異文化交流の能力を備え、物事の考え方も変わり、自分なりの価値観も成り立つ。大学での教育は知識の教育のみならず、学生の健全的人格を育てるのも、専門講義教員の任務でもあり、責任でもある。

３－２　授業内容に合わせる文化的知識の浸透

「共同教育プログラム」で使われる基礎日本語の教材は、『基礎日語総合教程』で、このシリーズの教材を選んだ理由としては、ユニットごとに話題別の設置と実践的が挙げられる。教員はテキストの内容に合わせて、補足すべきだと思う文化知識を随時に導入するのが必要であろう。以下はその例である。

表3

	文化関連内容	文化知識の補足
第二冊 ユニット5	日本の食事と文化	伝統的食べ物や食事マナーなどの実例
	文化の広がりと相違	中国と日本の食文化の対象（食べ物への認識、食事マナーなどの違い、国際交流時注意すべき点など、日本と中国の国民性、異文化をどう認識し、対処するかについてなど
第三冊 ユニット2	エンルムの春風――北海道・襟裳岬	日本の自然風景名場所の紹介、日本人の美意識
	風景と信仰	仏教知識、仏教用語、日本のお寺、四国八十八ヶ所遍路、宗教信仰の問題
	松江八景と瀟湘八景	「八景」の概念、中国の「八景」、「八景」に関する文学作品
第三冊 ユニット4	日本のものづくり	「匠人精神」について
	日本企業の中国進出について 経済のグローバル化	日本経済の基本知識、日本企業の文化や制度など

教員としては、テキスト内容に応じるような基本文化教養が必要である。さらに、相応する文化体験がある場合、実例を挙げながら、文化知識を補足できるのも教員の魅力になり、博学で学生の信用を得よう。

４．共同教育プログラムにおける基礎日本語授業の教育改善の実践

４－１　共同教育プログラムにおける基礎日本語教育の実態

共同教育プログラムの協定によって、三重大学から長期滞在教員と短期集中講義教員が天津師範大学に派遣されている。長期滞在教員の主な担当科目には、基礎日本語と「提携関係」となる講義には「聴解」と「会話」がある。基礎日本語の講義を担当する中国人教員と力を合わせて、入学から二年間の基礎日本語知識を教え、実用を磨かせている。学院において、一週間に一回例会が行われ、各学年とクラス、学生一人ずつの問題、教育方法の改善、協力の仕方を検討するのが主な話題である。また、長期滞在教員と短期滞在教員との仕事上の交流などによっても、中国人教員の日本語力の成長も停滞することなく磨かれる同時に、学生のためにもよい言語実践環境を備えている。こうして、教員も学生とともに成長するようなシステムが作られ、共同教育プログラムのようなやり方をうまく実践しつつ、多くの日本語人材を育ててきた。毎年3月に三重大学からの研修団を迎える頃、学生たちはボランティアになり、言語実践相互学習だけではなく、観光案内など様々な活動で日本の大学生と触れ合い、日本語の実践を国内にいながらにして、実現できている。

共同教育プログラムの協定により、学生たちは三年次に三重大学での一年間留学が定められている。留学することによって、学生たちは中国と日本の大学教育を両方体験でき、お互いのよさをうまく利用しながら成長を遂げている。留学の学習内容については、三重大学の関係学部の志望分野のゼミに入り、日本人学生とともに一年間にわたる学部生生活を送るわけである。今まで学生たちの志望分野については、教育学（日本語教育、幼児教育、授業論など）、社会科（歴史学、地理学、経済学など）、文学（日本近代文学）、心理学（統計心理学、社会心理学など）、芸術（美術、芸術教育）などさまざまな分野があり、志望調整と指導教員の分配、留学生を受け入れるシステムも整備されている。分野志望は大体二年目末に決めさせるため、それまでに基礎日本語教員にとって、学生の留学に備える指導には、留学時どのゼミに入り、どのような分野に興味があるのかも、日常の講義で学生に宣伝し、それに関連する情報と専門分野の選び方なども学生に対して、適当な指導もしなければならない。学生に自分に向く学習分野を選べるのを協力するのに、日常で行う講義では、言語知識基礎を固めることと、教科書に合わせる様々な文化知識の導入もする必要が十分ある。

４－２　教育方法改善実践について

理論教育と比べると、実践教育は直観性、総合性、創造性があり、学生の日本語力を鍛える効果的教育方法である。基礎日本語授業は、先生は大事な存在である一方、主体とな

る学生の役割も見逃してはいけない。実践教育の主な理念は、学生に任務を完成させるということ。教員としては、完全に手放しているかというと、そうでもない。どのような方法と手段を活かして、学生に実践活動に身を投じてもらうのかが主な任務で、適当な時点でコメントと指導を入れるのも主な任務である。

共同教育プログラムの基礎日本語授業では、学生を主体とする実践的教育方を実行されてきた。まず、「日本語で話そう」という授業前の「演説」が授業するたびに行われている。学生たちに「当番」を決めさせ、各自で決めた内容（自分で書いたものや、ニュース、豆知識紹介などの段落など）をみんなの前で発表させ、聞き手の質問に答えさせる。発表の内容や仕方は学生に任せ、教員は不足の部分などを指導して、改善を促す。このような日常発表によって、学生は緊張感を緩め、堂々とみんなの前で話せるようになり、自主的意識も育てられた。また、教科書の内容に合わせて、一週間に一回ぐらい講義中発表を行っている。以下は今まで行われてきた発表の例である。

表4

発表課題	発表の仕方	発表内容
自己紹介	一人ずつ発表する。	名前、年齢、出身地、
世界各国の紹介	一人に一ヶ国を担当する	各国事情の紹介
インタビュー	大学生の一方面を調査する。アンケートを作って調査を行い、調査結果をPPTで発表	大学生の読書生活、化粧への見方、スポーツ、趣味など
世界遺産紹介	一人ずつPPTで発表する。	日本の世界遺産、中国の世界遺産
食事や食べ物の紹介	グループで、PPTによって紹介する。発表内容を分けて紹介する。	日本と中国の伝統料理、おやつ、地元の名料理と名店など
好きな芸能人（スポーツ選手）	一人ずつ発表する	日本、中国、世界各国の好きな役者、俳優、歌手、芸人の技芸、個人的教養など
観光ガイド	グループで発表する。案内案を作って、発表する	日本、あるいは中国の観光地を選んで、観光スケジュール
ほか	一グループずつ好きな話題や内容をPPTで発表する	日本の漫画、アニメ、ドラマ、伝統芸能、伝統文化など

発表内容に関して、聞き手は質問をし、答えさせるほか、教員も含めて、聞き手全員でコメントを書いてみせるのも恒例となっている。コメントの内容には、日本語表現や言葉遣いのみならず、話すスピード、声の大きさ、字の大きさ、さらに発表時の体勢、ジェスチャー、表情、服装などなんでもある。聞き手のコメントを通じて、よい点を活かし、よくない点を反省、改善する。お互いに評価することによっても、学生の個性を磨くこともでき、他人の評価や批判を快く受け入れるようになり、全面的成長が遂げ、人格改善もできている。

図1. 九期生初回発表記念写真（2016.11）

図2. 発表中の学生

5．結語

基礎日本語の担当教員は、学生の日本語学習生涯において、大きな役割を果たしている。それゆえ、理論教育における言語知識と文化知識の教育をうまく調整しながら進められるような教員が求められている。また、より効率的教育が行えるため、学生が主体にする実践教育の改革も必要となっている。教育者としての責任も、教育内容も厳しい事情にある基礎日本語の担当教員は、人材育成に応じられる教育の理念と態度、効果的教育方法などを工夫しなければならない。また、様々な試験に備え、積極的な受験指導をすることも望まれている。

共同教育プログラムの基礎日本語教員は、学生の留学にも備え、日常教育から学生の志望進路など正しく導けるような浸透も必要で、日本の大学教育の仕方などに合わせる積極

的な教育改革実践もしなければならない。

参考文献

李暁俞（2013）「基礎日語課程中的実践応用能力培養」『湖北文理学院学報』第34巻第9期、pp. 73-74.

田明（2014）「基礎日語課程増加実践教学環節的研究」『学術論壇』pp.197

陳丹（2009）「基礎日語課程実践性教学的改革与探索」『語文学刊・外語教育教学』2009（3）pp.145－146